

第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の中央部からやや南東に位置する、農学部本館棟と講義棟間に連合獣医学科棟の新営が計画された。新営予定地内は昭和56年度に中庭環境整備に伴い立会調査を行っているが、工事に伴う掘削深度がわずかであったため、構内造成による埋め土の堆積を確認したにとどまった。したがって、当地域における埋蔵文化財の有無、分布状況などについてはほとんど把握できないのが現状であった。

連合獣医学科棟新営計画の具体化を受けて、埋蔵文化財資料館運営委員会はその取扱いを協議した。その結果、新営予定地内の埋蔵文化財の有無を明らかにするため、試掘調査を実施することが至当であると判断した。これを受けて埋蔵文化財資料館は新営予定地内の中央部に、東西に幅2m、長さ13mのトレンチ（Aトレンチ）、東端部に幅2m、長さ19.5mのトレンチ（Bトレンチ）の二本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。

その結果、Aトレンチで南北方向に流れる河川跡を検出し、Bトレンチは攪乱が多いもののその全面が河川跡の埋積土で占められていた。埋積土から縄文土器や石鏃などが出土し、縄文時代晩期の河川跡であることが明らかとなった。さらに、その規模、流路方向を確認するため、Aトレンチと平行して新営予定地の北側に幅1m、長さ9mのトレンチ（Cトレンチ）、および南側に幅1m、長さ8.5mのトレンチ（Dトレンチ）を設定して調査を行ったところ、Dトレンチでは攪乱によって河川跡の肩部を検出できなかったが、Cトレンチで肩部を確認したことから、ほぼ北から南へ走行する河川であることが判明した。

新営予定地は駐車場として活用されており、調査時期を関係部局と協議した結果、駐車場としての機能にあまり支障のない夏期休業時期に調査を行うこととなった。調査期間は平成3年7月22日から8月10日まで、調査面積は76㎡である。



Fig. 4 調査区位置図

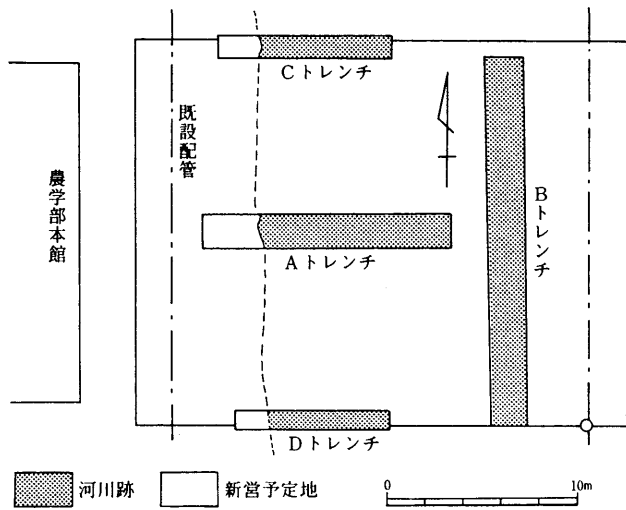


Fig. 5 トレンチ設定図

削を行った。河川跡の検出面に至る層順はA・C・Dトレンチ同様極めて単純で、約40～45cmの構内造成に伴う埋め土の直下が河川跡の埋積土である。

3 遺構

河川跡 (Fig.7, PL.2)

縄文時代晩期の河川跡で、Aトレンチの西端から約3.3m、Cトレンチの西端から約2.3m東側で西側の川岸を検出した。検出面の標高は約21.1～21.2m。Dトレンチでは既設の配管によって河川跡の肩部は検出できなかったが、立地、周辺地形、A・B両トレンチでの河川跡の底面の標高差からほぼ北から南への流路をもつと考えられる。その規模はBトレンチでは東側の川岸は検出できなかったが、今回の試掘調査地域のすぐ西側で実施した、第4章第1節で述べる農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査では、河川跡の東側の川岸は検出されていないことから、幅約17m以上、25m以下と推定される。深さは最深部で検出面から約1.1mである。

河川跡はAトレンチのy=743.5付近での埋積土の立ち上がりにもみられるように、新旧二時期に区分されるが、両河川跡とも縄文時代晩期の遺物を含んでいることから大きな時期差は考えられない。埋積土は砂および礫であるが、礫の占める割合が多く比較的急な流れをもつ河川であったことが想定できる。なお、Aトレンチの東側では埋積土の中位付近で植物遺体を含む粗砂層が検出されており、滞水状態に近い時期が存在したことが窺われる。

出土遺物には縄文土器深鉢、石鏃などがあるが、事前調査を待って一括して報告することにした。

2 層位 (Fig.6, PL.3)

A・C・Dトレンチ

現地表面から約35～40cm下位まで、構内造成による埋め土が水平に近く客土され、その直下が河川跡の検出面である黄褐色粘土 (10YR5/8) の地山である。

Bトレンチ

トレンチ全面が河川跡の埋積土である。そのため、河川跡の検出面を確認した後、南北両端部について河川跡の掘

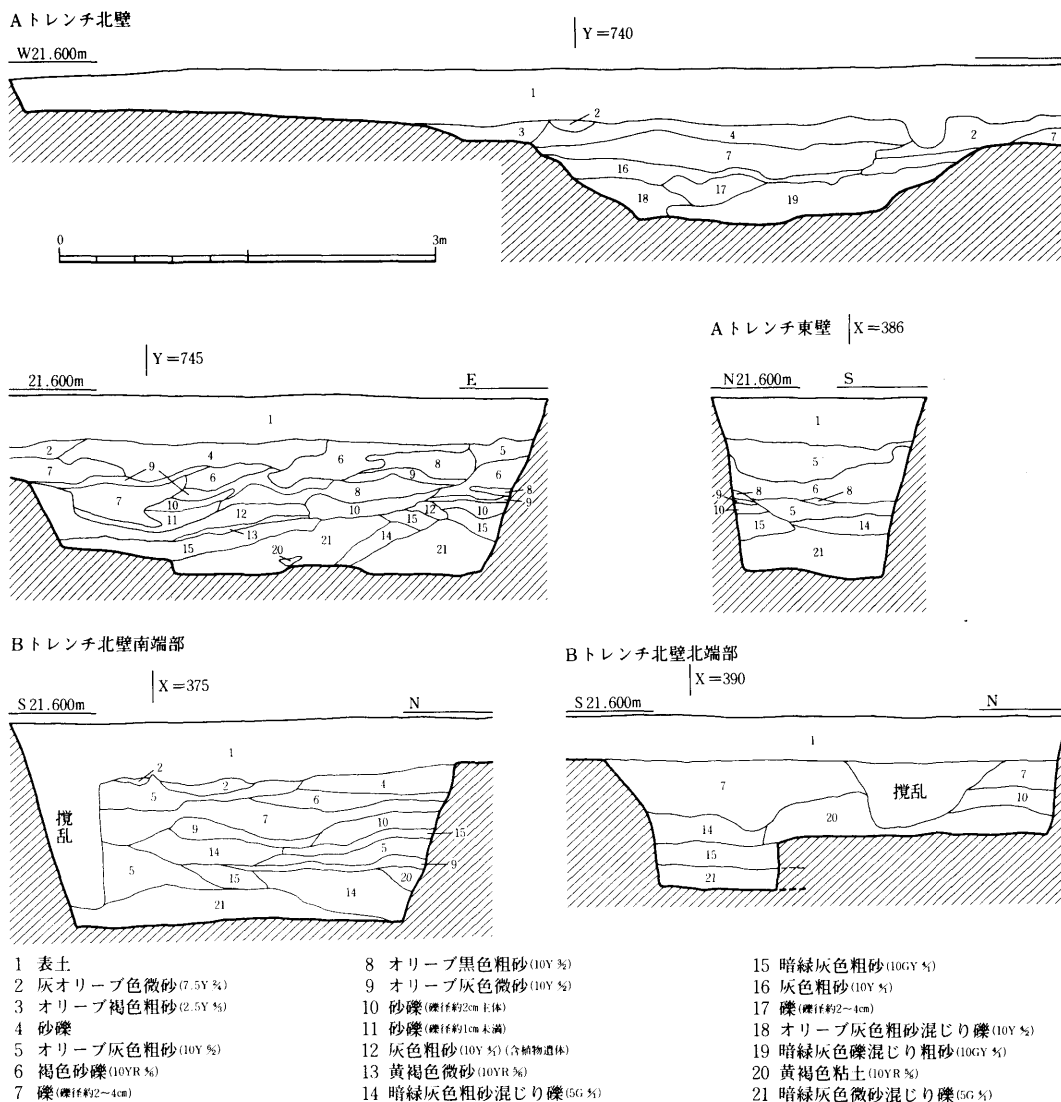
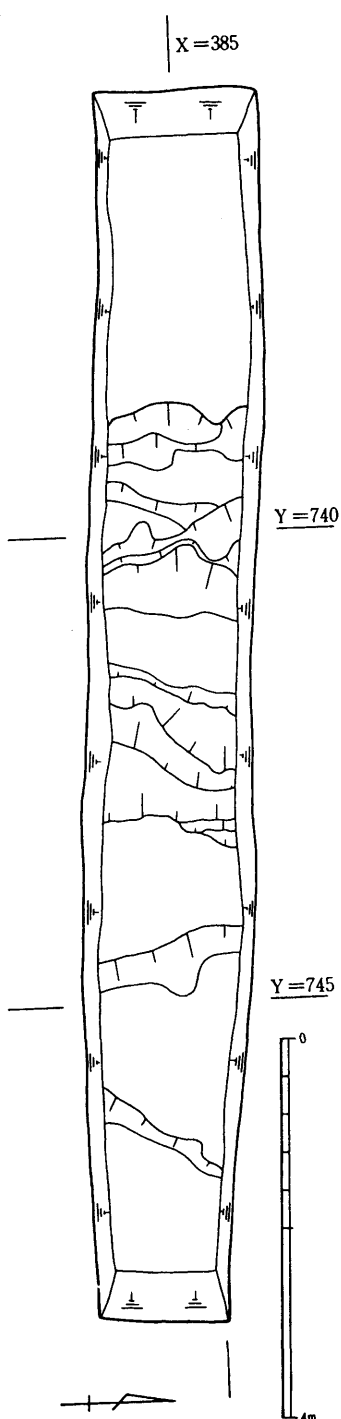


Fig. 6 A・Bトレンチ土層断面図

4 小結

吉田構内ではこれまで縄文時代の遺構の検出例は多くはない。わずかに教育学部附属養護学校敷地で土壌、構内の南西部に位置する南門の周辺や教養部複合棟敷地で河川跡などの存在が知られているにすぎず、構内における縄文時代の集落については弥生時代以降の集落の調査成果と比較していまだ不明確な部分が多い。その意味から、今回の調査で検出した河川跡は、吉田構内における縄文時代の集落立地やその規模の解明に基礎資料を提示



掘Fig. 7 A トレンチ河川跡実測図

したといえる。今後、新営予定地内での事前調査や周辺での調査等でその詳細は明らかになるとと思われるが、今回の試掘調査の結果から想定できることについて若干述べておきたい。

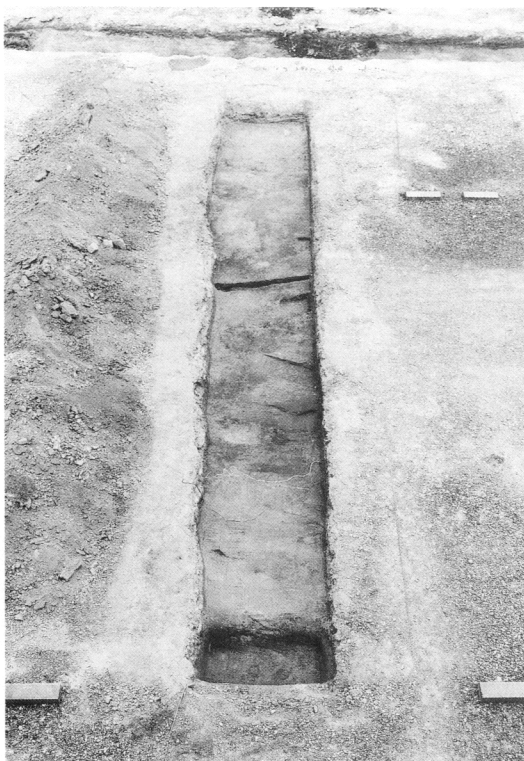
まず、河川跡の流路は、今回の調査地の北東約80mに位置する第二学生食堂敷地周辺が洪積台地上に立地していること、調査地の北東に位置する実験水田が洪積台地の掘削によって形成されていることなどの周辺の諸地形から、今回の調査地の北東に存在する溜池を源として、その南に位置する北東から南西に開ける小規模な谷あいを貫流して今回の調査地域に至る流路が考えられる。また、調査地の北東約80mに位置する⁴⁾大学会館前庭部の下段、北約150mに位置する⁵⁾大学会館敷地などからは、遺物包含層中より縄文土器が出土している。遺物包含層は第二学生食堂敷地周辺の洪積台地が北東および東に下降する丘陵斜面に堆積したもので、その供給源は台地上位の地域である。したがって、縄文時代の集落は第二学生食堂敷地周辺がそのひとつの立地場所と考えられる。なお、調査地の東に位置する果樹園も立地の候補地と考えられるが、その全面についての調査は行われておらず、今後の調査に期待したい。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年)。
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団(『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』、1976年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』、1988年)。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年)。

吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う試掘調査

(1)



(1) Aトレンチ河川跡検出状況(西から)



(2) Aトレンチ河川跡完掘状況(西から)



(3) Cトレンチ河川跡検出状況(西から)



(4) Dトレンチ河川跡検出状況(西から)



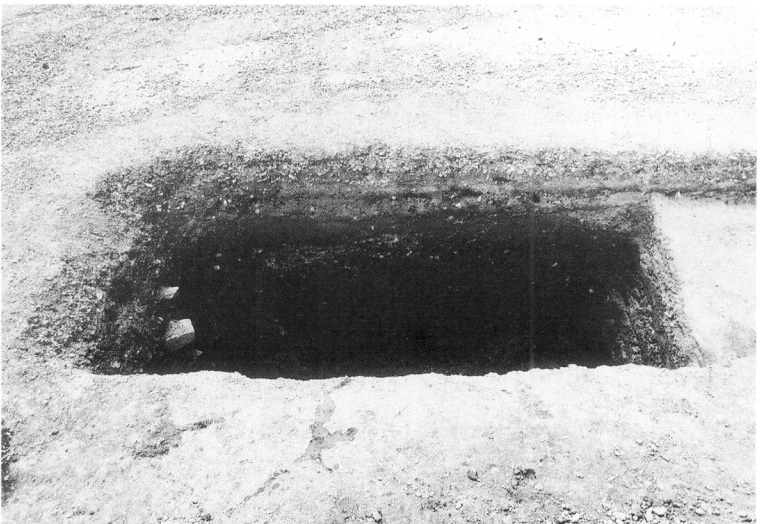
(1) Aトレンチ西半部河川跡土層断面(南から)



(2) Aトレンチ中央部河川跡土層断面(南から)



(3) Aトレンチ東端部河川跡土層断面(南から)



(4) Bトレンチ南端部河川跡土層断面(東から)